『長生殿』訳注（八）

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/9619

出版情報：中国文学論集．31，pp. 91-105，2002-12-25．九州大学中国文学会
バージョン：published
権利関係：
長生殿

訳注（八）

竹村則行

凡例

長生殿。本文の底本には、現在最も流布している徐朝方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本。

塩谷温国語長生殿。国語訳文大成。所収。一九三七年。

徐朝方校注 長生殿。人民文学出版社。一九五八年。

蔡運長 長生殿通俗注释。雲南人民出版社。一九八七年。

竹村則行 長生殿箋注。甲州古籍出版社。一九九九年。

本訳注では、主に前記参考書に於いてなお未注の故事出撰等について注する事にした。

囲欄に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や雛字をも含めて、

「チック文字」の体裁で示した。

五 訳語のうち、原文の「介」科を「くさじ」と呼ぶ部分。体裁導入がこの部分。底本の通りに小字で示した。

六 訳文は、「チック文字」で示した「唱」部分の訳出を含め、珍重な語文の形式を探る。意味内容の解釈を重視しつつ、努力して
平易な日本文になるように留意した。

【双語】

武陵花

宮車は巡り行く。

光中、幾多の哀怨の歌を覚えたか。夢のなかにたたずく形はよく見えぬ。

千々に乱れる我が愁いのよう。秋風に木々の枯れ葉が無数に落ち、空行ば、雁の鳴き声は悲しみを増す。

上月が見じて、やがて夢も近い。嬉しいことに飯軍をよしと喰いたのもので、行路を緩めてゆこう。ただ、この鳥の鳴き花は落ち、青く澄んだ山河を眼にしては、朕の悲哀をかかげでるばかりだ。どうか気晴らしをなさって、あまり悲しみなさい。

是べえ、高力士、朕は貴妃と、坐ればひじかを並べ、歩いては肩を寄り添わせてきたが、今日慌ただしく西方に御幸し、彼女を見つ結果となってしまった。これを真人がどうして捨てておかねようか。

訳者の誤解や力量不足による生硬な

詠でも、詠の影響で我々は道を急いで、先で待っておれ。内で操縦を喰らして応する介介

句、竹村が新たに訳書した。
思い出し、涙がどっと流れ落ちる。馬鹿ばれの手紙を返せば、彼女を失った恨みが胸をふさぐ。

雨が降ってきました。どうか陛下は観察闇を行くとて、何人を苦しめることがなる。かくも物寂しい中、この峨眉山の峰とは道を行く人を少なく、冷たい雨

前宮

雨に浸じて高き、低き強いてる。この傷心の時に、往々貴妃の墓が思いやられる。そこでは白楊は遠くも近きも、かすかに流る私の血

雨が激しく降り、今こそ貴妃の孤独の霊魂は寂しい思いでいるだろう。鬼火が寒そうに光り、草薙の陰には蛻

雨が止みましたので、今この高宮を下りましょう。

長生殿　和注
私は元来、未曾見の心を発し、天地を押して頭を垂れ深く反省する。天帝よ、天帝よ、思えばこの星月夜の下で、天に向かって祈り捧げることに詫びておる。

たとえこの雁が転生できなかったとしても、私は黄泉路ですっと天帝のお許しくお待ち申し上げます。この願いは、天地の善業が無実を証言して下さいますよう。天帝よ、私は元来、未曾見の心を発し、天地を押して頭を垂れ深く反省する。天帝よ、天帝よ、思えばこの星月夜の下で、天に向かって祈り捧げることに詫びておる。
闇黒麻
あなたはもう蓬莱宮の仙籍に名前があったのです。地上の宮殿に落ちた為に、人間の世界を歩むことも天界に帰ることが難しかったのです。

前線
月が通行証を受け取り、感謝する私。土地神様のお導きに深く感謝します。怨恨にまみれたこの霊魂は、どうして

注
「原文は『你本是蓬萊籍中有名』」
唐・李隱『澗潭録』に「勅詔仙子楊氏、爾居玉闇之時、常多傲慢、譏塵戸家之後、轉

有騷動」と。
戰旗建在飛揚的太極旗杆上。周圍的士兵們喜氣洋洋。

國家的安定、人民的和平，都是因為有這些勇敢的士兵。人們在慶祝這個偉大的勝利。

張明，一名勇猛的士兵，今天迎來了他的勝利。他在戰場上揮舞著長刀，勇猛無敵。他的一切行動都顯示出他是一位傑出的戰士。

軍隊在張明的帶領下，順利地攻破了敵人的陣地。士兵們奮勇拼殺，最後取得了勝利。

張明，堅決地向前衝，他的勇敢和智慧，讓敵人感到了恐懼。他是一名真正的英雄，為國為民，他無愧於國，無愧於人民。
こと。

れ二人は一隊に分かれ、一隊が交戦しているとき、もう一隊が横から撃って出れば、必ずや大勝するであろう。丑〇なるほどもっとも。我らの大小の軍隊は、こここそ一隊に分かれて突撃するのだ。四名の隊が応じ、

隊を分けて行進をする。もう一隊に分かれて敵を迎え撃ち、まず第一戦で敗れるぶりを。旗はやぶれ、哀しげに大

鼓を鳴らすが、そのすぐ前に別の一隊が勇を鼓して先駆し、威を奮って敵将の首を奪うのだ。

我こそは大唐王朝の朔方節度使郭子儀であると。天子の軍隊の出ましに、前日は馬を下りて縛らぬしようと

ず、いつまで待たせるつもりか。丑〇つべこべ言わず。馬を出せ。戦う。哥が敗れの人を。走って退場。

兵士を連れて登場し、外を連れて交戦する。哥が敗れの人を。走って退場。兵士を連れて交戦する。

尾声。長安や洛陽は勝利の言報を待ちわび、皇祖の聖廟は暗雲が晴れて再び日月を見る。こうして唐王朝は再興

さて、幾万年も続くであろう。
略过
高力士に酒をこしへ。貴妃に献進せよよ。丑が酒をさげる科○最初の御御酒でございませ。生が酒を捧げて笑

四辺静。私の酒杯を手に持っても、そなたはどうしてその赤い唇でこの手から酒を受けることができる。私は心の悲しみを抑えられず、「貴妃よ」と呼びかけて、手ずから御御酒を供えれば、涙がくくんと溢れて杯に満ち

「四殺」なみなみと注いだ神酒を再び捧げても、恨みは暗く沈んで尽きない。天も地も真っ暗な中、寡人は茫然としてその一杯を飲むことができるだろう。丑がまた酒を捧げて笑

生が酒杯を捧げる科○二杯目の酒でございませ。丑が笑酒を捧げて笑

「四殺」なそのの霊魂を祭る儀礼は終わっていたが、心中を語れば話はいつまでも尽きない。寡人がそなたと金釵鉢の永遠の誓いに背いた為に、白絹でそなたの命を奪い、恨みがどこまでも尽きない黄泉の国へ送ることになった。丑が杯を受けた画像に献上する科○
三殺 下

小山のように積んだ金色や銀色の紙銭の束、あの世の貴妃のために何万枚も焼く。この紙銭こそが、どうして貴妃の降臨を購うことができるか。貴妃衣は空しくも関わらず、耳には泣いて血を吐くホットギスの怒りの声がひびく。我が心が、風に舞う灰を追って貴妃の一対の蝶になることもできる。一日何時になったら、天空に鸚鵡が現れ、雲に乗って遙かに帰るように、その世の住む世界へ行くことができるだろうか。

三殺 上

見れば、貴妃のあとに涙が垂れ、目にはいっぱい涙を溜め、ぼろぼろと神座の上に涙が流れ落ちている。小山が心を wollen。貴妃が当時思い出して、声も出ずに嘆き悲しんでいるのである。その傷つき方は、真にこの世に二つと無いもの、この人形が涙を流すのは言うまでもないが、穏やかな心を持った私にとって断腸の思いなのか。

三殺 下

見れば、老官の高力士が貴妃像の前に両膝をつぎ、老官女が地に伏して傷み悲しんでいる。貴妃様こそが一枚の遊歩を歩こう。斎を、貴妃のために紙銭をお焚きください。

三殺 上

見れば、老官の高力士が貴妃像の前に両膝をつぎ、老官女が地に伏して傷み悲しんでいる。貴妃様こそが一枚の遊歩を歩こう。斎を、貴妃のために紙銭をお焚きください。

三殺 下

見れば、老官の高力士が貴妃像の前に両膝をつぎ、老官女が地に伏して傷み悲しんでいる。貴妃様こそが一枚の遊歩を歩こう。斎を、貴妃のために紙銭をお焚きください。
殿尾

真新しい祠廟を出ても涙は止まらず、
行宮に戻ってもこの心の痛みがどうして忘れられよう。
落日と夕焼けを空しく眺めるだけです。
命人は今夜、遙かと夢のなかで、

幾筋もの香煙が霊廟の門から漂い流れ出す
かの貴妃は巫山の仙女が洛水の女神か
神像の美しい眉は在りし日の貴妃のよう。

日も暮れて、

注

分開鶯花楼」と。

『元・高松

怨別

白居易

長恨歌

天上人間会相見・

白居易

元・元散曲。所収に「

復庭花

生拆散驚聴会、

注

『生拆開比翼鸚鵡』。

命人はただ亡き人を傷むばかり。

曹

権

徳興

譜

封

彥冲

『人間天上、

此恨怎能償。白居易「

長恨歌」に

天上人間会相見、此恨纏綿無絕期』

と。